

“ONE TEAM”な患者会【前橋日赤糖友会】の改革

～地域医療支援病院として多職種協働と病診連携を活かし存続危機から脱出～

末丸 大悟^{1,14}, 齋藤 久美², 林 昌子², 飯田 早苗³, 鈴木 典浩³, 高木 あけみ⁴, 木村 真依子⁵,
関口 美香⁶, 阿部 奈規⁶, 町田 忠利⁷, 大澤 淳子⁷, 阿部 克幸⁸, 山田 玲菜⁸, 角田 圭⁹,
高橋 美和子¹⁰, 加藤 和子¹¹, 高畑 絢子¹², 須賀 一夫¹³, 山田 早耶香¹, 石塚 高広¹, 上原 豊¹,
岩本 美佐子¹⁴, 高橋 留美子¹⁴, 黒澤 久美子¹⁴, 末丸 美央¹⁴

¹前橋赤十字病院糖尿病・内分泌内科, ²前橋赤十字病院看護部, ³前橋赤十字病院事務部,
⁴原町赤十字病院看護部, ⁵前橋赤十字病院臨床心理外来, ⁶前橋赤十字病院臨床検査部,
⁷前橋赤十字病院薬剤部, ⁸前橋赤十字病院栄養課, ⁹前橋赤十字病院リハビリテーション科,
¹⁰前橋赤十字病院眼科, ¹¹前橋赤十字病院歯科衛生課, ¹²前橋赤十字病院医療社会福祉課,
¹³前橋赤十字病院地域医療連携課, ¹⁴すえまる内科

「糖尿病学の父」と称されるエリオット・P・ジョスリンの言葉に「糖尿病患者教育は治療そのもの」とある。糖尿病診療において患者教育は重要であり、その一つに患者会も含まれると考える。決して患者主体・主導の会とは限らず、患者、患者家族、糖尿病に興味のある方、医療スタッフからなる“友の会”という意味を含む会であり日本糖尿病協会が主軸となっている。

当院では、糖尿病に関する正しい知識を増やす場として、糖尿病と上手く付き合っていけるよう療養生活での疑問点を相談、解決できる場として【前橋日赤糖友会】を昭和63年に設立し現在に至っている。令和元年を迎えて早々に直面した問題点には、高齢化に伴い会員数が減少傾向にあること、患者会に協力する看護師の不在などが挙げられ、患者会が存続危機に陥った。その背景に、本会活動がボランティアであるがゆえに、多忙な日常業務の中で協力的ではあるものの関わり方に看護スタッフ間で温度差を認めていたことがわかった。これまでの本会運営は看護師主導であったが、不在に伴い医師主導とし事務部の協力を得て多職種で引き続き密な連携をとる方針へ切り替えた。病院内で患者会活動が周知されていなかったことも一因と考え、病院が患者サービスの一環として患者会をバックアップして推進してもらえるよう病院幹部メンバーに働きかけ、病院ホームページへの掲載、院内患者図書室へのパンフレット設置などを図った。また、当院通院中の患者だけでなく、以前当院にて糖尿病教育入院歴があり近医通院中の患者、6カ月に1回の頻度でかかりつけ医と糖尿病地域連携パスを導入している患者、地域の方々も気軽に参加できる体制を整えた。パイロットモデルとして当院から半径4km圏内にあるすえまる内科に協力依頼し、待合室へのパンフレット設置や、診療の際に患者会の紹介を行っていった。結果、医療スタッフからなる賛助会員を除く患者会員が7人であったのが22人へ増加した。また課外活動として年1回開催される糖尿病ウォークラリー（群馬県糖尿病協会主催）への参加人数も6人から24人へと増加を認めた。

群馬県では13病院が地域医療支援病院として承認され、内4病院が前橋市にあり、当院もその内に含まれる。かかりつけ医へ通院中の患者への支援を提供することは地域医療支援病院の役割の一つと考える。糖尿病看護認定看護師(CN)や日本糖尿病療養指導士(CDE-J)、群馬県糖尿病療養指導士(L-CDE)等の資格を取得している多職種協働のメリットを活かし、“ONE TEAM(ワンチーム)”をモットーに新たな患者会の在り方を模索しつつ、地域全体の糖尿病医療の質向上、患者の生活の質向上につながればと考える。